◆利尻島郷土資料館解説シート

利尻の近代史Ⅱ　人びとの信仰と石碑

利尻島には、民間信仰や記念碑、海難碑、句碑、顕彰碑など実にさまざまな石碑が多く残されています。そのなかで、ここではおもな民間信仰と石碑について解説します。

庚申（こうしん）信仰は、中国の道教に由来し、人の体内に住む三尸（さんし＝虫）が、庚申の晩、人が寝ている間に天帝に日頃の悪事を報告するため、夜明かしをすれば免れるという信仰です。利尻島では、青森・秋田の出身者による信仰が盛んで、ニシン大漁・家内安全を願い、祭礼行事である庚申講も開かれていました。現在でも、明治末～昭和のはじめにかけて建立された石碑が残されており、野塚・石崎・鰊泊神社・南浜・鬼脇大沢寺・金崎神社・政泊・仙法志専称寺・沓形・蘭泊神社の１０ヶ所で確認されています。

金崎の庚申（大正６年）

太平山三吉（たいへいざんさんきち）信仰は、秋田県の太平山に鎮座する太平山三吉神社に由来し、勝利成功、事業繁栄を願うものです。秋田県移住者により信仰され「さんきちさん・みよしさん」と呼ばれ親しまれました。島内には、明治～昭和初めにかけて、金崎、沼浦、南浜、神磯、神居の５ヶ所が知られています。かつては、例祭日があって沼浦や南浜では講が組織されていたり、南浜や神磯ではお堂があった時期もありました。神居には今でもお堂と石碑があって内部には、奉納物である鉄板製のワラジ、キセルなどがあります。

沼浦の三吉碑（昭和７年）

また、海・漁業の神としての龍神信仰もさかんで、島内の寺社には龍神のご神体や奉納額、八大龍王碑などが祀られています。最古のものとしては、鴛泊ペシ岬のふもとに厳島神社があり、明治以前には航海の神・場所中心の神として弁天社（龍王社）が建立されていました。

八大龍王碑（妙海寺、昭和初期）

このほか浄土宗・浄土真宗のお寺に聖徳太子碑が建てられていたり、海難事故による遭難者を弔う碑などがあります。

利尻島にこれだけ数多くの信仰と石碑が残されている背景には、石材を調達しやすい土地であることだけでなく、移住元の故郷を思う信仰心、結びつきの強い地域社会があったからだと考えられます。

◆この件に関するお問い合せは、利尻富士町教育委員会（電話 0163-82-1370）まで